

(様式4)

令和8年3月17日

富山県教育委員会教育長 殿

富山県立中央農業高等学校
校長 室井康志

令和7年度学校総合評価を別紙(様式5)とともに提出します。

令和7年度 学校総合評価

6 今年度の重点課題に対する総合評価

「学習活動」「基礎的・基本的知識技術の習得」「自己責任を考える」「寮生会活動の活性化」「進路支援」の5つの重点項目を掲げて学校アクションプランを設定した。

「学習活動」では、躍進賞の受賞者は昨年比で減ったが、優秀賞を獲得した生徒は増えた。優秀賞を獲得する生徒は、学年を重ねても継続して取り組む様子が見られる。タブレットを用いた授業を行う際には、ICT支援員と連携してタブレットの活用法を共有することができた。互見授業は、参加した教員からそれぞれの先生方に多くのアドバイスが見られたため、大変有意義な取り組みだといえる。それぞれの取り組みが教科指導の向上につながっていることから評価は「B：ほぼ達成」とした。

「基礎的・基本的知識技術の習得」では、日本農業技術検定の合格率において、1・3学年が達成目標をクリアすることができなかったことから評価は「C：現状維持」とした。

「自己責任を考える」では、時間を守る意識の向上は高まった。また、あいさつ運動は、概ね継続的かつ自発的に行われてことから評価は「B：ほぼ達成した」とした。

「寮生会活動の活性化」では、役員会および集い・集会は、目標通り取り組むことができたが、生徒役員が自発的に開催する雰囲気づくりや、自治組織である寮生会が、自ら寮風を高めていこうとする意識づけが課題であることから評価は「B：ほぼ達成した」とした。

「進路支援」では、数値目標を達成することができた。今年度は進学が就職の人数を大幅に上回り、就農目的の進学も4名から6名に増加した。一方、2年生のインターンシップは受け入れ先が承諾してくれないなどの理由から、5名の生徒が夏期休業期間に実施できなかったため、3月に実施を予定している。

7 次年度へ向けての課題と方策

学校評議員からは、本校の学校行事や研究等の取り組みが報道機関を通じて数多く取り上げられていることや、3年間の学習を通して生徒が農業に関心を持つようになり、就農目的での進学者が増えていることが高い評価を受けた。また、近年の米価の高騰等により農業に関心が寄せられるようになってきたことから、現在が子どもたちに農業に目を向かせるチャンスであり、中央農業の取り組みをさらにPRし、一人でも多くの中学生に興味関心を持たせてほしいという意見をいただいた。

今後も多様な生徒一人一人に応じた指導のPDCAサイクルを実践しながら、農業教育の活性化と充実発展、担い手の輩出、地域社会の持続的な発展に貢献できる職業人の育成という本校の使命を果たすため、教育活動の一層の充実を図ってまいりたい。

(様式5)

8 学校アクションプラン

令和7年度 中央農業高等学校アクションプラン - 1 -

重点項目	学習活動							
重点課題	学習習慣の確立と学習意欲の向上	タブレットを活用した授業の取り組み						
現 状	生徒たちの学力差が大きく、より生徒の実態に応じた指導が大切であると考えている。 生徒の学習状況を調査すると、予習復習等の自学自習は行っていない、学習方法がわからない、と回答した生徒が多かった。自学自習を習慣化させ、学力の向上を図る必要があると考える。	タブレットを活用している生徒は、98.7%で、うち授業への活用については60%以上の生徒が「効果を実感している」と昨年度のアンケート結果で示されている。 引き続き生徒が主体的に学習活動に取り組むことができるタブレットの適切な活用方法を推進する必要がある。						
達成目標	<ul style="list-style-type: none"> ●躍進賞獲得（学びの基礎診断テストの2回目の成績が20点以上アップ） ・・・学年20%以上 ●優秀賞獲得（ポイント30点以上） ・・・学年30%以上 	<ul style="list-style-type: none"> ●タブレットを適切に活用ができる ・・・100% 						
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ●ポイント制の見直し 課題の提出状況、得点の進捗状況、自学自習の取り組み状況によりポイントを付与し、可視化する。 ●自学自習の取り組み 自学自習ノートの継続 ●中農チャレンジ、朝学習 取り組み内容の精査と国・数・英の底上げ ●質問コーナーの継続 職員室前で生徒と教師が利用する場面が見られたため、引き続き学習力向上を目的に、机とイスを設置する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●アンケートで確認し、取り組みができていない生徒へのサポートを行う。 ●互見授業の活用。 ●ICT支援員との連携を密にすることで、教員間でタブレットの効果的な活用法を共有する。 (今年から予約制に変更) 						
達成度	<p>○躍進賞獲得</p> <p>1年・・・6.9%</p> <p>2年・・・20.0% (R6 24.3%)</p> <p>3年は4月1回のみとなるため対象外</p> <p>○優秀賞獲得予定（2月25日現在）</p> <p>1年・・・17.2%</p> <p>2年・・・25.7% (R6 16.0%)</p> <p>3年・・・0.0% (R6 4.8%)</p> <p>躍進賞は、学年によって達成されている様子が見られた。</p> <p>優秀賞の達成度としては、想定を下回っているが、生徒の目標という意味で今後も役立ててもらいたい。</p>	<p>○タブレットに関するアンケート</p> <p>・学習や学校生活に関係する活動にのみタブレットを活用している。 94.7%</p> <p>・タブレット活用のルール厳守について</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>できている</th> <th>できていない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>86.8%</td> <td>13.2%</td> </tr> <tr> <td>(97.4%)</td> <td>(2.6%)</td> </tr> </tbody> </table> <p>・授業でタブレットを使って印象に残っていること</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆各教科（英語、農業、数学ほか） 17 ☆調べ物学習に利用できる 6 ☆カフト（問題作成）楽しい 5 ☆特になし 3 ☆ほとんど使っていないからわからん ☆充電の減りが早い ☆英語で翻訳できる ☆ほかもろもろ・・・ 	できている	できていない	86.8%	13.2%	(97.4%)	(2.6%)
できている	できていない							
86.8%	13.2%							
(97.4%)	(2.6%)							

<p>具体的な 取り組み 状況</p>	<p>4月上旬 One-Week トライアル回収・返却 第1回学びの基礎力診断テスト 自学自習ノートの配布、勉強法の説明 5月下旬 結果到着 6月 担任より、生徒面談によるフィードバック 7月 課題：One-Week トライアル配布 9月 One-Week トライアル回収・返却 第2回学びの基礎力診断テスト（1・2年のみ実施） 10月 結果到着 11月 担任より、生徒面談によるフィードバック 12月 学習の見直し 3月 表彰</p>	<p>4月 1年生タブレット活用ガイドンス 6・11月 互見授業 教員間でタブレットを活用した授業を見合う。 7月 タブレット購入に関するガイドンス 1月 アンケートの実施</p>
<p>評 価</p>	<p>B</p>	<p>【学習習慣の確立と学習意欲の向上】 昨年度に比べ、躍進賞の受賞者が減っている。その原因として、考査と異なり、成績に直結しておらず、学習への取り組みの甘さが見られる生徒がいる。 優秀賞を獲得する生徒は、学年を重ねても継続して取り組む様子が見られる。 中農チャレンジの内容を精査し、業者の選定を行ったが、生徒の習熟度、学習状況などを踏まえると、更新するには至らなかった。</p> <p>【タブレットを活用した授業の取り組み】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●大半の生徒がタブレットをうまく活用できている。今年から1年生と2・3年生で使用するタブレットが異なるため、教科によっては、使用しやすくなったと変化を感じている。 ●ICT支援員と連携して、校務支援システムやタブレットの活用法を共有することができた。 ●互見授業の参加で、それぞれの先生方に多くのアドバイスが見られ、大変有意義な取り組みにつながっている。誰に見られてもわかる授業作りを目指すことは、教員にとって永遠の取り組みでもある。
<p>〈評価基準〉 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった</p>		
<p>学校評議員の意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎学力の底上げについて質問があり、科目「中農チャレンジ」を通じて学び直しを行っていることを伝えた。 ・タブレットの使用方法について質問があり、教科によって適切に実施している。 	
<p>次年度へ向けての課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中農チャレンジの中身の充実。 ・タブレットの継続的な使用方法について。 	

重点項目	基礎的・基本的知識技術の習得	
重点課題	「資格取得と客観的評価」	
現 状	例年、各資格習得に対する目標を示しているが、指導体制や各職員、各学年の資格習得に対する意識の統一が十分とは言えなかった。このことにより、日頃の農業教育による学習効果が十分に発揮されていなかった。	
達成目標	1 学年「日本農業技術検定 3 級合格」 学年取得率 20%以上 2 学年「日本農業技術検定 3 級合格」 学年取得率 30%以上 3 学年「日本農業技術検定 3 級合格」 学年取得率 40%以上	
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・ 検定の実施日、日程については保護者・生徒に連絡する。 ・ 検定の指導体制については、授業内で検定に触れ、対策講座を開講する。 ・ 検定取得は進学や就職に有利になるというメリットを理解させ、より多くの検定受検に挑戦するようにクラス担任、生徒に意識的に働きかける。 	
達成度	1 年生 16.1% (18.4%)、2 年生 30.6% (38.0%) 3 年生 39.3% (36.4%) 注) () は、昨年度の実績	
具体的な取り組み状況	検定試験は7月と12月に行われ、各回に放課後1時間程度の対策講座を5回程度実施した。共通範囲である農業基礎に関する過去問題の解説、出題される傾向について講義を行った。それにより、集中して学習する雰囲気ができ、上位の級を受検したいという向上心をもった生徒も現れた。また、今年度より、幅広い農業の知識についてより深く学ぶ「農業探求」という科目を2学年で設定し、年度当初は選択者6名のうち4名が日本農業技術検定3級未取得者であったが、本年度4名とも3級に合格した。	
評 価	C	2 学年のみ目標を達成できたが、1、3 学年は目標に届かなかった。
〈評価基準〉	A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった	
学校評議員の意見	方策にある通り、検定取得が進学や就職に有利になることを生徒に理解させるように具体的なメリットを整理し、生徒に伝わるような取り組みをしてほしい。	
次年度へ向けての課題	大学等の入試において、日本農業技術検定の取得やアグリマイスター顕彰制度の認定によって優遇措置を行う進学先を調査し、生徒に周知する。今年度中に農場センター掲示板に日本農業技術検定の優遇措置について掲示した。次年度には各学年や進路指導部と連携し、継続的な周知の方策を検討し実施することで、生徒が主体的に資格取得を目指せるように促す。	

重点項目	自己責任を考える	
重点課題	<ul style="list-style-type: none"> ・民法改正による18歳成人引き下げに伴い、生徒自らが自己の行動に責任を持つことができる。(自己責任) ・信頼される中農生として、学校生活3か条「挨拶をする、服装を正す、時間を守る」を意識できる。(時間の管理) ・登下校時において交通事故の危険を回避することができる。(命の尊さを考える) 	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・概ね学校ルールを遵守できている。自分自身の行動の一つ一つの結果までを考えるまでには至っていない。 ・学校生活3か条は、過去の取り組みから、年々意識向上している。今年度もこれらを定着させるために、粘り強い指導を継続する。 ・交通安全への意識は十分とはいえないため、継続的に指導する。 	
達成目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自己責任について考えることができる。 ・時間管理がしっかりできる [達成目標]：生徒へのアンケートにおいて達成できた→95%以上	<ul style="list-style-type: none"> ・自転車、歩行による交通安全意識の向上 [達成目標]：交通ルールを守る意識 事故件数 ゼロ
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの実施 ・各学期の始業式と終業式および、大型連休前に校則の遵守指導を実施 ・生徒会執行部と希望者による平日8:00～8:20に寮から本館の渡り廊下付近にて「あいさつ運動」を毎年実施 ・生徒会執行部を中心に時間管理や自己責任の啓蒙活動を実施。 ・HR会長、風紀委員を中心に生徒への呼びかけを実施。 	<ul style="list-style-type: none"> ・交通安全教室において意識調査の実施 ・全体への指導：各学期の始業式と終業式および大型連休前に交通安全指導を実施する ・交通安全街頭指導の継続(中農坂～福沢地内) ・校地内(中農坂～T字路まで)の自転車運転の禁止と安全点検の徹底
具体的な取り組み状況	「信頼される中農生」意識向上(自己責任)(時間の管理) <ul style="list-style-type: none"> ・アンケートを実施し意識を高めた。 ・集会等での意識向上の啓蒙 交通事故の危険回避(命の尊さを考える) <ul style="list-style-type: none"> ・交通安全教室の実施、集会等で交通安全の啓蒙、通学生への指導 	
評 価	B	<ul style="list-style-type: none"> ・時間を守る意識向上は高まった。 ・あいさつ運動は、継続的かつ自発的に行われていた。
〈評価基準〉	A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった	
学校評議員の意見	「信頼される中農生」は大切なことだが、ただ意識向上させるだけでなく、行動に自信が持てる中農生を育ててほしい。そのためには厳しく指導するだけでなく「褒めて伸ばす」指導が必要だと思われる。(熊南昭浩評議員)	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・成人年齢の引き下げにより、在学中に成人する生徒が出てくる中、自己責任についての自覚を引き続き啓蒙していく。 ・「交通安全意識」(命の尊さの自覚)について、通年の指導に加え生徒会執行部が中心となり企画・提案していくよう指導する。 ・「時間管理」について継続して指導する。 ・タブレットの正しい使用について啓蒙していく。 ・教職員が一丸となって生徒との「信頼関係」を構築し、厳しい中にも「褒めて伸ばす」指導を確立させ、行動に自信の持てる中農生育成を目指す。 ※これらの課題は指導の長期的継続が必要と考える。	

重点項目	寮生会活動の活性化について	
重点課題	寮生会が主体となって、寮生の安心と安全を保障し、且つ充実した生活を送れるような、寮運営を進めていきたい。そのための意識の涵養を目指すものである。	
現 状	<p>現在、寮生会の諸活動および、寮内のルールは、主に教員が中心となって計画・運用されている。寮生の自治組織である寮生会が主体となって、行事の計画、立案及び運営していく体制を整えるとともに、自らルールを設定し、全寮生へ周知、徹底を図ることを目標とした、寮生会運営を望むところである。以上のことから、下記の通り、対策を講じていきたい。</p> <p>対策1 『寮生会役員会について』</p> <p>週1回、役員会を設定し、諸行事と規則についての話し合いの場を設ける。話し合われた内容をまとめ、寮生への周知の仕方等について検討させる。</p> <p>対策2 『夕べの集い・寮生集会について』</p> <p>毎日夜に夕べの集い・月1回に寮生集会を設け、役員会で諮った内容を周知させるとともに、組織的な運営の仕方について、学ぶ機会とする。</p>	
達成目標	<p>① 週1回の寮生会役員会の実施と毎日の夜に夕べの集い、月1回に寮生集会を実施できる。</p> <p>②寮生が主体となって行事等を企画、立案、運営することができる。</p>	
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・寮生会顧問および寮務部職員が中心となって指導し、活動を具体化させる。 ・寮生全員が協力し、寮運営が進められるよう奮起を促す。 	
達 成 度	<p>① 週1回の役員会、毎日の夜に夕べの集いは実施できたが、昨年度は寮生集会を学期に1回しか実施できなかったが、今年度は2回実施できた。</p> <p>② 寮祭、夏祭り、映写会等に加え、新たな行事の企画、立案、運営が寮生主体の下、実施できた。</p>	
具体的な取り組み状況	<p>寮生会役員会の取り組みは、寮生諸行事の企画、立案、運営に関する内容であり、寮生による主体的な行事の運営に一定の成果があった。</p> <p>毎日の夕べの集いや寮生集会は実施できたが、内容が寮生活についてのルールやマナーに関する注意喚起が主であり、寮生会運営に関するものは昨年度よりは実施できた。</p>	
評 価	B	<p>役員会および集い・集会は、目標通り取り組むことができた。役員会等の開催については、教職員の働きかけがほとんどであったが、昨年度と比べると生徒役員の自主性が見られた。今後は、生徒役員が自発的に開催する雰囲気づくりや、自治組織である寮生会が、自ら寮風を高めていこうとする意識づけが課題であると考えている。</p>
〈評価基準〉	A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった	
学校評議員の意見	<p>特に意見はなかったが、生徒が安心・安全な生活できる環境づくりを引き続き継続して取り組んでほしい。</p>	
次年度へ向けての課題	<p>今年度は、昨年度より自治組織である寮生会が、自ら規則を考え、ルールを守るための雰囲気づくりを作り上げるための取り組みを工夫していたように思われる。今後も、継続して取り組んでいきたい。また、寮生会役員が、リーダーとして寮生の模範となり、寮生が生活しやすいように運営できるための支援指導をさらに進めていきたい。</p>	

重点項目	進路支援				
重点課題	進路先の確保、インターンシップ体験率の向上				
現 状	<p>本校は農業科の単独校ではあるが、実際の就職や進学は多様な分野にわたっており、卒業後ただちに就農する生徒は少ない。しかし長期的な展望において、生徒が卒業後に他の分野での知識や技術を活用し、新時代に対応した就農につなげていくことを期することから、どの分野への進路についてもそれぞれの適性或志望に応じた支援をすることに努めている。</p> <p>具体的には、進学では、国公立大学農学部への進学を志す生徒がいる一方で、経済系や情報系の専門学校等への志望者もおり、また就職の志望先においても、農業法人のみならず、製造、販売、建築、サービスと幅広い。そこで各学年において、ワークショップ形式とガイダンス形式との両方で、それぞれ進路学習の時間を設けるとともに、民間業者や企業団体等の協力を得て、進学や就職についての相談会も適宜開催し、就農に特化した相談会も年に1回開催している。</p> <p>さらに2年次においてインターンシップを実施するとともに、3年次では解禁日以降になるべく積極的に応募前企業見学に臨むよう勧めている。</p> <p>・過去3年間のインターンシップ実施状況 (※数字は各年度3月調査のもの、分母は在籍数)</p>				
	第2学年までの体験者数	R3年度 34/41人 (82%)	R4年度 24/37人 (65%)	R5年度 42/42人 (100%)	R6年度 27/28人 (96%)
	↓	↓	↓	↓	↓
第3学年までの体験者数	R4年度 36/41人 (88%)	R5年度 30/36人 (83%)	R6年度 42/42人 (100%)	R7年度 28/28人 (100%)	
達成目標	3年生の進路先決定率100%、2年生のインターンシップ体験率90%以上				
方 策	<ul style="list-style-type: none"> キャリアパスポート等を活用しながら、生徒の自己理解を深めさせ、同時に進路についての相談会等を各学年ともに年間に複数回開催する。 各大学等の入試情報を全国レベルで収集するとともに、アドミッションポリシーに着目し、生徒の適性を勘案しながら農業学習や寮生活での体験を活用できるように支援する。 インターンシップについては、農林水産公社等とも連携し、受け入れ先の増加や事業所との情報交換を促進させる。 				
達成度	3年生の進路先決定率96%、2年生のインターンシップ体験率86% (5名が未)				
具体的な取り組み状況	<p>一昨年度から始めた1、2年生対象の就職相談会が、参加企業が思うように集まらないため、今年度は見送ることを関係団体から申し入れられた。ただ3年次対象の就職説明会は何とか開催したいので、協力してほしいとのことであり、進路希望調査の実施等を通じて、すでに開催に向けて準備を始めている。また限られた時間にできるだけ多く企業見学ができるように、進路指導費を運用して大型タクシーなどによる見学ツアーを開催したところ、2名の生徒の就職に結び付いた。履歴書の様式も変わり、自己PRや志望理由の記述に重点が置かれるようになったため、これまで以上に就職応募書類の点検と指導は入念に行った。</p>				
評 価	B	<p>3学年28名中26名が最初の出願・応募で、合格および内定となったが、就職希望者1名は自衛官への志望を断念し、現在、県内の民間企業に応募中である。今年度は進学が就職の人数を大幅に上回り、就農目的の進学も4名から6名に増加した。一方、2年生のインターンシップは受け入れ先が承諾してくれないなどの理由から、5名の生徒が夏期休業期間に実施できなかった。(3月に実施を予定)</p>			
〈評価基準〉	A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった				
学校評議員の意見	<p>昨今は様々な企業が多角経営に乗り出し、農業分野への参入も多くなっていることから、就農を志す生徒にとって、インターンシップは必ずしも農業法人でなくてもよいのではないかと。これからの農業には他の産業の知見も必要である。</p>				
次年度へ向けての課題	<p>就農に特化した応募前企業見学のツアーを企画できるとよいと思うものの、進路指導部が仲介して行うとなると時期的に求人解禁の繁忙期でもあるため、極めて困難である。しかし一方で業者に仲介を依頼しても農業法人とのコネクションがないため実現は難しい。</p>				

